

〈2019 年度企画の趣旨〉

「枢要徳 (virtutes cardinales)」, すなわち思慮・正義・勇気・節制の四つの主要な徳を巡る研究は, 中世哲学研究の中でも近年大きな進展を見せている領域の一つである。前世紀中葉の Delhaye や Gauthier, そして, Lottin らの研究は, 近年になって, 中世全体を視野に収めた István P. Bejczy による『中世における枢要徳——4 世紀から 14 世紀の倫理思想の研究』(2011) や 13 世紀に焦点を絞った Rollen E. Houser の『枢要徳——アキナス, アルベルトゥス, 総長フィリップス』(2004) などによって更新され, 教父思想や中世思想への枢要徳の伝播については一定の見通しを描くことができる下地が徐々に形成されつつある。

枢要徳は古代ギリシアに起源を持ちながらも, 信仰・希望・愛徳という対神徳を補完するものとして教父時代から初期中世にかけて受容され, キリスト教的な人間像を考える上での基本的な枠組みを与えたと理解されることが多い。しかし, 枢要徳はときに司牧的な伝統の中で, 上記の対神徳と共に, 個人の救済を妨げる悪徳や罪に対する効果的な治療法という観点から考察されるなど, その関心や取り扱われ方は, 時代や思想家によっても少なからぬ相違を見せている。例えば, Lottin によれば, 枢要徳の数を巡る問題は, 13 世紀前半において特に論じられたものの一つであり, アルベルトゥスやトマス, ボナヴェントゥラの内には, 四という数の必然性を説明する実に多様な論拠が見出される。また, 枢要徳の順序もこの時代, とりわけトマスにおいて論じられたテーマであり, 『知恵の書』(8.7) では節制・思慮・正義・勇気とある一方で, ヒエロニムスの『イザヤ書注解』では思慮・正義・勇気・節制とあり, 大グレゴリウスの『道徳論またはヨブ記注解』では思慮・節制・勇気・正義の順序を採っていることは, 彼以前において枢要徳の順序が任意のものであったことを傍証する。それでは, こうした古代ギリシア世界からキリスト教世界へと至る伝播の歴史の中で, キリスト教世界の思想家たちは, この枢要徳をどのような関心と共に受容し, その思想を展開させていったのだろうか。本シンポジウム企画の第一の趣旨としてあるのは, こうした中世の枢要徳思想を巡る歴史研究という点である。

ところで, 枢要徳を始めとする徳倫理の思想は, 近代において台頭して

きた義務論や功利主義によって次第に倫理学の傍流へと追いやられていく。しかしながら、そうした近代道徳哲学が人間の行為そのものの性格や結果に焦点を当て、行為する主体や行為者の視点を欠くものであることは度々指摘される点であり、このことをもとに行為者自身の在り方に定位する徳倫理の復権がときに要請される。その意味で、本シンポジウム企画を通じて中世における枢要徳思想の形成と展開を辿ることは、徳倫理の役割が見直されようとしている現代的な関心と連結し、その問題提起と検討材料を提供する上でも大きな意義を持つとすることができる。

シンポジウム企画チーム（藤本温，山田庄太郎，松村良祐）は、このような問題意識のもとで、2年連続企画として「枢要徳の形成と発展」を提案した。2019年度は「教父時代における枢要徳の受容と形成」を課題として担い、古代ギリシアにおけるこれら四つの主要な徳の位置付けを見ると共に、アレクサンドリアのクレメンス、アンブロシウス、アウグスティヌスの三者に焦点を当てることで、古代ギリシアに起源を持ち、プラトンや新プラトン主義、ストア派によって彫琢された枢要徳がキリスト教思想にどのように根を下ろしていくのかを検討していく。そして、2020年度は「スコラ学における枢要徳の発展」を課題として担うこととした。

2019-20年度シンポジウム企画委員：

藤本 温，山田庄太郎，松村良祐（文責）